

《修士論文要旨》

「対人結合と対人不安との関係」

－原子価構造の影響に関する実証的研究－

近 澤 朋 加*

I. 問 題

本研究の目的は人と人との繋がりである原子価と、繋がりから生じる対人不安との関係を明らかにすることである。具体的には個人の持つ原子価構造中でもマイナス原子価が対人不安の感じ方にどのような違いがあるのかを明らかにすることである。

1. 対人不安

ここでの対人不安とは、小川（1974）の定義した、「従来の対人恐怖症を踏まえた対人恐怖症内の人に対する不安意識のことである」という対人不安意識を対人不安として定義している。そのため対人不安には対人恐怖が深く関わっているといえる。

①対人恐怖症と対人不安意識

対人恐怖について様々な分野から指摘がなされている。昔の対人恐怖は赤面恐怖や醜貌恐怖、自己臭恐怖など身体の問題を主体とした症状が多かったことに対して、現在では理由はよく分からないが、人とつきあうことが苦手であると対人恐怖が出現してきている。

また、対人恐怖症の研究として小川捷之（1974）は、対人恐怖を訴える悩みを整理し作成した尺度を対人恐怖症の人120人に評定させている。それらをもとに小川は対人不安意識を定義した。

2. 原子価理論

原子価とは、Bion（1961）によって創始されStock&Thelen（1985）の実証的研究に基づいており、後にHafsi（1997, 2006）によって発展された理論である。Hafsiによれば原子価とは「(外部的、内部的) 対象との一定の安定した形(類型) による繋がりと関係を可能にする個人的な心的(無意識的) 準備状態である」と定義されている。原子価には4つの分類があり、そして健康な人は1つの活動的原子価と3つの補助的原子価を持っているとされている。

①マイナス原子価

マイナス原子価とは、原子価をプラス原子価と病理的なマイナス原子価とに区別したことから出てきた概念である。Hafsiによれば、プラス原子価は、原子価が建設的に機能し両者の心的成長に通じる場合に相当している。一方で、マイナス原子価は原子価が逆に機能し、主体と対象を繋ぐこともなくむしろ両者の攻撃的分離、相互的破壊、対人関係の崩壊をもたらす場合を指し示

平成23年度 *社会学研究科社会学専攻（臨床心理学コース）

すものである。原子価論によれば、3つの形態がある。それは過小の原子価、過度の原子価、未分化の原子価がある。以上のことから次のような仮説を立てた

仮説1：マイナス原子価を持っている人ほど、対人不安をより強く感じ、対人恐怖症的になるのではないか。

仮説2：個人の持つ過度の原子価（ $-DV \cdot -FV \cdot -PV \cdot -FIV$ ）の種類によって対人不安をより強く感じる内容が異なるのではないか。

Ⅱ. 方 法

1. 研究対象

本研究の対象は奈良大学心理学科の学生154名（男性94名、61%：女性60名、39%）が対象である。

2. 尺度

2つの尺度を使用している。1つは小川の対人不安意識質問票より対人に関係した26項目を抜粋し使用した対人不安尺度。もう1つは原子価を査定する、VAT (Valency Assessment Test) である。この2つを講義後に実施し回収した。

Ⅲ. 結 果

2つの尺度を照合し114名のデータを使用した。また、対人不安尺度を信頼性分析にかけた。結果 $\alpha = .930$ と高い数値を示し、信頼性が証明された。

1. 因子分析

対人不安尺度を因子分析にかけた結果、5つの因子が抽出された。それぞれの因子の特徴から、1つめは他者評価に関する対人不安、2つめはグループに関する対人不安、3つめは他者視線に関する対人不安、4つめは対象が不明な対人不安、5つめが身近な人に関する対人不安とした。

2. 一元配置分散分析

因子分析で得られた因子と原子価との関係を調べるために一元配置分散分析を行った (Table 1参照)。以上の結果から、原子価の種類によって、対人不安を感じる内容が異なることがあきらかとなった。

3. 2つの原子価構造による比較 (t 検定)

詳細な分析を行うために、2つの原子価構造を比較するための t 検定を行った。VATの結果から、各原子価の平均評定が5以下の原子価を3つ以上保有している人を、マイナス原子価構造

を持つ人とした。またそれ以外をプラス原子価構造とした (Table 2)。その結果マイナス原子価構造を持つ人はそうでないひとよりより強く対人不安を感じる事が明らかとなった。

IV. 考 察

各分析の結果より、仮説はすべて実証された。それにより、マイナス原子価構造を持つ人は、対人不安を人より強く感じる事がいえる。

V. 参考文献

- Hafsi, Med 2003『ピオンへの道標』ナカニシヤ出版
 Hafsi, Med 2010『「絆」の精神分析－ピオンの原子価の概念から「原子価論」への旅路－』ナカニシヤ出版
 福井康之 2007『青年期の対人恐怖 自己試練の苦悩から人格成熟へ』金剛出版
 堀井・俊章・小川捷之・卯月研次『青年期における対人不安意に関する研究』心理臨床学研究13 215-221

VI. 付 録

Table 1 一元配置分散分析結果

因子	原子価				有意確率
	依存	闘争	つがい	逃避	
他者評価に関する対人不安	3.575 (.598)	2.978 (.887)	2.493 (.591)	2.347 (1.13)	.000
グループに関する対人不安	2.919 (.989)	3.500 (1.13)	3.213 (1.05)	4.018 (.519)	.007
他者視線に関する対人不安	2.798 (.848)	3.357 (.866)	2.691 (1.03)	2.510 (.847)	.022
対象不明な対人不安	3.376 (.857)	2.75 (1.05)	2.833 (.686)	3.071 (1.46)	.008
身近な人に対する対人不安	2.155 (.657)	2.549 (.786)	2.542 (.792)	2.000 (.715)	.021

Table 2 t検定結果

因子	原子価構造		有意確率
	健康な人	マイナス原子価構造	
他者評価に関する対人不安	3.089 (.795)	3.663 (.711)	.000
グループに関する対人不安	2.952 (1.015)	3.473 (1.017)	.006
他者視線に関する対人不安	2.753 (.881)	3.116 (.895)	.027
対象不明な対人不安	3.053 (.906)	3.465 (.959)	.016
身近な人に対する対人不安	2.158 (.606)	2.504 (.872)	.008

Note: 数値は平均値、()内は標準偏差を表す。